

2005年7月8日：大学教育センター主催：立教大学 阿部治教授講演会

「国連・持続可能な開発のための教育の10年：その意義と高等教育機関の役割」における平山健一学長のあいさつ

皆さんこんにちは、学長の平山です。本日はたくさんではありませんが、本学の教育に深い関心を持つ先生方、大学教育センターの先生方、先見の明のある学生さん達に集まっていただきましてありがとうございます。今日の講演会は、立教大学から、わが国における環境教育の第一人者である阿部治先生をお招きして、タイトルにあるような内容でご講演をいただくことになりました。阿部先生には、大変お忙しいところ、岩手大学においでいただきまして、心からお礼を申し上げます。

私からこの講演会を開催した趣旨について、少しお話ししたいと思います。ご承知のように北東北は、気候も厳しく、苦難の歴史をたどってきました。そのような土地に育かれた精神的風土は、他にない特色を持っており、ねばり強く、着実に、他人に配慮する寛容さを持った、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩にあるような人材こそがこの地域の誇るべき特徴だと考えています。

企業の方からも、岩手大学の卒業生は離職率が非常に低く、企業の一番辛いところを着実に担ってくれるという良い評判をいただいております。岩手大学ではこのような風土を活かした人材を育てていきたいと考え、本学が養成する人材像を5つの教育目標として掲げました。しかしながら、「幅広い知識と広く深い教養」等の表現は、すべてが含まれてしまうような余りに抽象的な目標であり、実際の教育の場で、それをどのように反映したらよいか曖昧になっていたことはご承知の通りです。

この様な現状を踏まえ、目標をもう少し具体化し、現場の教育活動や学生の行動につなげることの出来る、もっと身近で理解しやすい言葉で示すことが出来ないかと考えて参りました。幸い、本学では、Let's びぎんプロジェクトで、たくさんの学生が環境問題に積極的に取り組んでいます。また、各学部では構内の清掃を学生と共にやったり、省エネの運動も実施しております。最近、玉理事から提案のあった「持続可能な開発」(sustainable development)という考え方は、本学が中期計画で掲げてきたこのような取り組みも包括しております。また、教育研究の大多数の取り組みの方向性にも合致しており、本学の教職員の共通の行動規範として、基本的なご賛同を頂けるのではないかと考えに至り、その最初のステップとして、ESD (Education for Sustainable Development)について理解を深めるため、この講演会を企画致しました。

もし多くの皆さんに、この様な考え方に同意をいただけるのであれば、それは岩手大学の教育研究だけでなく、省エネルギー、省資源、3Rなどの動きにつながり、また地域の自然環境を大切にする幅広い活動にもつながるのではないかといろいろな思いを膨らませているところです。

岩手大学の教育のあり方やその具体的な進め方は、これから皆と共に議論して決めることですが、多分、阿部先生のご講演は、我々に大きなインパクトを与え、岩手大学にとって意義深いお話になると思いますので、ぜひ良く聞いていただきたいと思います。阿部先生には、この様な本学の想いにご理解を賜り、よろしくご講演をお願いします。